

■土肥実平 武将。源頼朝の挙兵に逸早く応じて活躍、幕府草創の立役者になるも、直前に消えた。相模土肥氏、小早川氏の祖。

どひさねひら

関白免職事件1120＝

この頃、_桓武平氏の千葉氏や畠山氏らと同族の良文流中村宗平の次男に生まれる。

Copilotによると、1176年に、50代以上が一般的な“老(おとな＝長老)”と呼ばれ、1180年の頼朝挙兵時には、中村党の中心として行動し、頼朝からも“最古参の御家人”として扱われて、おそらく60歳前後、1191年没とされていて、1120年頃生まれなら、没年齢は70歳前後、当時の武士としては十分あり得る寿命であることなどから、1110年代後半～1120年前後に生まれた可能性が高いとされる。

藤原清衡没・1128＝ 8歳：弟宗遠が誕生。

鳥羽院政始・1129＝ 9歳：

_相模国の有力豪族中村氏の一族で、足下郡(現在の神奈川県湯河原町および真鶴町)土肥郷を本拠とし、早川荘預所を務め、父や弟の土屋宗遠と共に相模国南西部において“中村党”と称される有力な武士団を形成していた。現在のJR東海道本線湯河原駅から城願寺の辺りが居館であったと言われている。

・ ・ ・ ・ ・ 1138＝18歳：

・ ・ ・ ・ ・ 1144＝24歳：_妹が、三浦庄司義継の四男岡崎四郎義実と婚姻。

・ ・ ・ ・ ・ 1147＝27歳：

頼長氏長者・1150＝30歳：この頃、_早川荘(牧)の在地領主となり、荘内に土肥郷を開発して郷司になり、土肥次郎実平を名乗る。

保元の乱・・1156＝36歳：_岡崎四郎義実、子(佐奈田)真田と一義忠が誕生。

平治の乱・・1159＝39歳：平治の乱に敗れた源義朝一家が殺され、

・ ・ ・ ・ ・ 1160＝40歳：三男頼朝が伊豆蛭が小島に流され、その弟義経は鞍馬で出家。

三十三間堂・1165＝45歳：

清盛太政大臣1167＝47歳：

・ ・ ・ ・ ・ 1174＝54歳：

・ ・ ・ ・ ・ 1176＝56歳：

_伊豆奥野の狩場で行われた河津祐泰(曾我兄弟の父)と俣野景久の相撲の判定を巡ってもめた際に、老(おとな・長老)として仲裁に入ったとされ、相模・伊豆の武士社会において重鎮と見做される存在であった。

源氏一斉蜂起1180＝60歳：_源頼朝が挙兵、妻政子の父北条時政を大将に、山木判官兼隆を討つと(山木の夜討ち)、岡崎四郎義実につながる三浦一族の応援、義実の子と一義忠の武勇を頼みに、平家との合戦に備えるべく、土肥一門を味方にしようと進駐してきたのに応え、嫡男の遠平ら中村党を率いて参じ、同じ相模・伊豆の有力な源氏方であった鎌倉党や工藤党が内部分裂したのに対して、一致して参じたことで頼朝の信任を受けた。石橋山の戦いで敗北した頼朝がわずか7・8騎で逃亡した際にも加わっており、頼朝が箱根山で自害を覚悟した際には、自害の作法・故実を伝授したとされ、頼朝と行動を伴にしたいと申し出る加藤景員や宇佐美祐茂に対して、今は敵に見つからないようにバラバラに逃げるのが大事であると説得したという。南郷山の西側には自鑑水(自害水)と呼ばれる池があり、頼朝が水面に映った自らの姿に失望して自害を決意したところを諫めたという逸話が残されている。頼朝主従が“しとどの窟”に隠れていたのを梶原景時が見逃した逸話はこの時のことで(土肥の相山と真鶴に“しとどの窟”跡がある)、頼朝を真鶴から房総半島の安房国へ脱出させ、頼朝は、千葉氏、上総氏らの参陣を得て、関東から大庭景親ら平家勢力を駆逐することに成功、頼朝は鎌倉に入る。以後、富士川の戦いなどに従軍。奥州から頼朝の陣を訪れた源義経を取り次ぎ、

平清盛没・・1181＝61歳：元旦に頼朝が鶴岡八幡宮を参拝し、本格的に造営するのに寄与、以後、元旦参拝が恒例行事になる。頼朝に降った梶原景時を取り成した。

・ ・ ・ ・ ・ 1182＝62歳：_生活は質実剛健で奢侈を好まなかったらしく、頼朝からもその謹厳な暮らし、振舞を称賛され、嫡男遠平に対しても、頼朝は、2年前の安房への脱出に際して、伊豆山の政子に使いに出したのをはじめ、何かと報告させてきたが、この年の政子の出産に際しても伊豆山権現へ安産祈願に出すほど、大事にしている。文覚が江の島に弁財天を勧請した法会に頼朝が出席したのに従う。

後鳥羽天皇・1183＝63歳：_後白河法皇に反抗して挙兵した木曾義仲を討つ範頼・義経らの軍議に加わって進言、討伐に従軍し(宇治川の戦い)、合戦後、大江山に派遣され京の入口を守った。

・ ・ ・ ・ ・ 1184＝64歳：_一ノ谷の戦いでは、源義経の軍に属して先陣となり活躍、唯一人生け捕りになった平重衡の朝廷への護送と京での守護も担うい、合戦後、吉備三国(備前・備中・備後)の惣追捕使(守護)に任ぜられた。山陽道を守り、源範頼の進軍を支援する。梶原景時と共に頼朝代官である範頼・義経の奉行として遠征軍に派遣されており、頼朝の信任が厚かったと思われる。

平氏滅亡・・1185＝65歳：_一ノ谷の合戦後、平清盛の妾であった厳島内侍を妾としたとも言われる。_瀬戸内海を西走する平氏を追い、藤戸の合戦で大苦戦すると、屋島の合戦を経て、壇ノ浦の戦いで平氏が滅亡、その後も土肥には帰らず、長府に居城し、長門国と周防国の惣追捕使として終戦処理し、捕虜を朝廷まで護送して完了、まさに、頼朝から絶対的な信頼を受けていた証であろう。その後、頼朝の命で、他の幹部らとともに、武士の乱行禁止に努めるうち、義経征伐のため、頼朝が動かした軍の先方になり、頼朝が中村荘に泊まっている。嫡男遠平が安芸国沼田本庄と新庄を拝領。平氏を滅亡させた頼朝が、父義朝を弔うために建立した南御堂(勝長寿院)の落慶法要に際しては、随兵の一員ではなく、高齢の功労者の一人として特別扱いされた。彼らと同等に扱われることに不満をもって頼朝に対抗しようとした義経を討つべく、頼朝の命で、畠山、三浦ほか御家人とともに、京都の義経亭を襲撃することになったが、互いに押し付け合って逃げるうち、土佐房昌俊が夜討ちをするも失敗、義経は奥州藤原氏のもとに落ち延びてしまう。この間、代官として支配していた土地では、旧体制の公家権力との衝突が絶えず、下総から鎌倉に出て来た千葉常胤が、頼朝に酒を献じて開かれた酒宴の宿老のうちに名は見えず、現地に止まらざるを得ない状況であったことが分かる。

奥州藤原滅亡1189＝69歳：地頭職を遠平に譲っていた長門国阿武郡を東大寺に寄進していることから、_なお、西国に止まっていたところ、頼朝の命で、義経を匿う奥州藤原氏との合戦に出陣、なお、重要な軍議には大きな発言権を有し、結局、義経は自害し、奥州藤原氏は滅亡に至る。

源頼朝上洛・1190＝70歳：頼朝が上洛、頼朝が後白河法皇と初めて対面した時にお供した10余名のなかに名前は見当たらないが、盛大に行われた右近衛大将の拝賀式の随兵7人の内選ばれている。

栄西臨濟宗始1191＝71歳：この年の元旦の鶴岡八幡宮参拝には、遠平に佩刀の名誉、続く若宮参拝の時には、その子惟平とともに、小早川姓で供奉したと記され、「沼田小早川家系図」では、この年の死去とされる。'岡崎義実とともに幕府の厩の普請奉行をした'との記述を最後に史料には見えなくなり、引退状態であったとも考えられるが、_奥州平定を感謝してか、人心掌握のためか、頼朝が建立を企図した羽黒山黄金堂の普請奉行となっていて、

鎌倉幕府始・1192＝72歳：頼朝が征夷大將軍となり鎌倉幕府を開いた年に、_工事半ばで没したらしい。羽黒山黄金堂には、のち、故郷湯河原と同じ実平像が奉納され、鶴岡の井岡の遠賀神社にある実平が実平の墓とされていることから、もともと、羽黒山と深い関係のあったことが窺える。「吾妻鏡」の1195年の条に'土肥後家尼参上'とあることから、1年以上前に死去したのは間違いなく、あまりにも遠地だったため、あいまいになったとみられ、翌年には、曾我兄弟の仇討ち事件が起きるが、その死者の多さが、土肥氏と曾我氏が密接につながっていたことと関係し、死没が不明になったことを物語っているようにも見える。所領であった安芸国沼田荘には、1219年に、遠平とともに遠平の妻である天窓妙仏尼(寺伝では源頼朝の娘)を弔うために、棲真寺を創建した記録が残っており、その頃まで生存していた可能性がある。安芸の米山寺過去帳では、1220年に死去とされている。

高橋徳「土肥実平と湯河原～鎌倉幕府草創の立役者の生涯～」(湯河原町教育委員会)、Wikipedia「土肥実平」、